

第一弾「卒業研究と本とわたし」(2018年)、第二弾「書評と本とわたし」(2019年)に続き、第三弾は「ゼミと本とわたし」というテーマでお届けしたい。輪読も卒論もゼミ活動のコアを担っており、そうしたアカデミックな作業がもつ意味合いを再考したい。学問という知的世界の扉を開くためにも。

第三弾には、岩井克人先生(国際基督教大学特別招聘教授、東京大学名誉教授)の寄稿文も掲載している。氏にはあらためて深く感謝申し上げたい。2004年冬学期の東大での「経済学史」講義。岩井先生の講義ぶり、話しぶり、書きぶり、そしてときに講義中に思考し考え込む姿。一人の学者がみせる断片的ながらも奥深い膨大なる「暗黙知」の世界。それらは私の中で今なお鮮明な記憶として生き続けている。

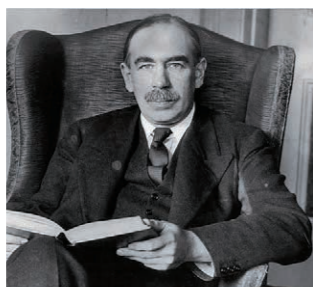
I. ゼミは輪読と書評の両輪で

一冊の書物をゼミ生全員で読み進める輪読は、各々のゼミが掲げる「研究テーマ」(私のゼミなら現代経済)についての学識を深めるとともに、輪読文献をめぐってゼミ内の意見交換と議論を活性化させる重要な営みだ。私の3年次ゼミでは、『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』を春学期の輪読文献に指定した。〈貨幣=おカネ〉という経済学の主要テーマにくわえ、昨今、〈資本主義〉についてもその変容と再編、限界・終焉論が世界的規模の学術的関心を再燃させている。こうした現代的動向にもぜひ広く知的好奇心をもってほしいとの願いから本書を選択した。実際、本書はゼミ生に大変好評だった。一見難しい経済学の専門的な概念と内容についても、岩井先生の明快な解説ぶりが手伝い、ゼミ生諸君は理解を深めることができたようで嬉しい限りだ。

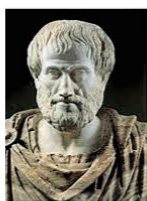
輪読はあらかじめ報告者を決め、担当箇所の概要を整理し、自分なりの感想や論点・疑問点を最後に記載したレジュメを準備させるのが一般的なケースだろう。報告者以外も当該箇所を事前に読んでくる。専門演習であるゼミ

輪読で学生が手こずるのは、「論点」の抽出作業だ。良い「疑問点」をあげることも容易でない。内容をふくめ、著者の思考を明確に追体験できていないと、すぐれた論点や疑問点を指摘することはできないからだ。輪読文献の読み込み=深読み作業が欠かせない。経済学の専門的な書物を読んだ経験がほとんどないうえ、そうした作業自体に心理的な抵抗があるのだが、興味深いのは時間を重ねるごとにゼミ生はかなり「適応」していけるということである。キーワードを指示すれば、そこから正確な論理展開もできるようになる。まさに「習うより慣れろ」だ。

たとえば岩井氏の当該文献の第2章は「金融危機と二つの資本主義論」とあり、主流派の〈新古典派〉と氏自身が支持する〈不均衡動学派〉の資本主義論という真っ向から「対立」する学説が構造的に整理されている。これはたんなる二元論でなく、資本主義をめぐる既存の経済理論・思想はこの2つの対抗軸に集約されるという、きわめて説得的な再構成なのだ。実際こうした俯瞰のなかに、「貨幣をめぐる二律背反」、資本主義の「効率性と安定性の二律背反」、ケインズ「美人コンテスト」投機論とそれが帰結する「合理性の逆説」、さらには、古代ギリシャのアリストテレスが発見しえた「ポリスの存立と崩壊をめぐる逆説」とそれが照射する21世紀のグローバル資本主義の多面的危機への含みなど、本書の多様な知見と洞察が凝縮されている。そしてやがてゼミ生は気付くのだ。この輪読文献が「社会」や「世界」としっかり繋がっているというこ



ケインズ



アリストテレス

ゼミと本とわたし

輪読と卒論からみえる世界

経済学部 塚本恭章

とに。経済学が社会科学の一分野である以上、それは当然ではあるが、ゼミ生自身がそのことを肌感覚として実感できたことこそが決定的な前進をなしている。

いうまでもなく、概して古典やすぐれた書物の輪読をつうじて得られるのはけっして無味乾燥で現実離れた空論ではありえない。そこには、混沌とし不透明な現代世界を読み解くための生きた知恵・知識や真理、端的に言えば、これから生き抜くための〈地図〉が描き出されている。社会に巣立っていく大学生にはそうした地図こそ必要でないか。少ない体験・経験値、狭い思考の仕方を見直し補ってくれる人類の知的遺産こそ〈書〉なのだから。

最終的にゼミ生全員が2000字程度で輪読文献を「書評」することになるが、おそらくこれが他のゼミにはない塚本ゼミの大きな特徴だろう。「書評=批評」することで、上記でいうゼミ生の〈気付き〉はより広がり、深みを増す。一般紙での書評を10年以上に及んで継続している私がつねに実感するのは、「書く」というアウトプットは、「読む」というインプットをより主体的なものへ引き上げ、書物の内在的理解への意識度も高めてくれるということである。他者に「読まれる」文章を「書きうる」ことで、それは真の意味で生きた「活字」になるのだ。ゼミ生諸君がはじめて挑戦して完成させた書評の出来栄えがなかなかの水準になっているのを見て、輪読の力は大きいことをあらためて強く認識できる。こうした作業の積み重ねが、4年次ゼミの卒業研究に繋がっていく(以上、塚本)。



II. 本との向き合い方、輪読で再発見

3年次 北川涼奈

ゼミという場ではじめて私は「輪読」というものを経験し、本との向き合い方に新たな気付きを得ました。以下は学生目線からの率直な体験談です。輪読という作業の難しさは複数ありましたが、それらは特に以下の3点でした。1つは、担当報告箇所の〈要約〉作業に関わります。頁数に対して制約されたレジュメの分量でしっかり大事な要点とポイントを押さえることの難しさ。文献の興味深い内容を文字起こしする作業において、著者の説明を自分なりの表現で再構成することは容易ではないけれど、理解を深めるうえで意義ある思考プロセスであることは強く実感できました。先生とゼミ生を交えての要約の相互確認とその後の議論・意見交換は、ひとりで行う読書では得られない気付きもありました。

2つ目は、〈論点・疑問点〉を抽出する作業です。文献を深く読み込めずこれができないと、当然ながらその後の議論が浅くなります。手順や準備作業の適切なステップを先生が導いてくださり、正しい方向性や段階を踏むことの大切さを感じながら輪読は遂行されていきました。一人の読書は、概して自分の欲しい情報や気になる箇所にフォーカスして読みがちですが、輪読では論点確認とそれにもとづく討論があるため、あらかじめ複数の論点を意識した〈読み込み〉ができるようになりました。私には大きな収穫です。

今まで精読と思っていた本の読み方がまだかなり浅いと〈再発見〉できた

点も、3つ目に指摘できる貴重な体験といえるでしょう。「じっくり読む=精読」という認識が私にはあったのですが、1冊の経済学の専門文献を深く「読み切る(抜く)」ことはきわめて知的かつ刺激的で、充実感がありました。岩井先生の輪読文献は、何度も読み返し自分で言語化したからこそ、手元に書物がなくても論点を意識して初対面の人に説明できるレベルに到達できたほどです。ゼミも後半になるほど、本を読み込む回数や本に書き込む回数も増し、なにより本が手になじむあの独特の感触。電子書籍にはない紙媒体の本の魅力もひきびきに感じました。

輪読後に書き上げた書評。塚本先生を介して私の書評が著者の岩井先生のもとに届き、私の想像を大きく超えて書評内容をじかに褒めてくださったことは、励みと喜びをより大きくしてくれました。岩井先生の本から学んだことは多くあります。自分のアンテナをしっかりと張って経済・世界情勢を知り、主体的な問題意識をもつこと。錯綜した現代の諸問題を冷静な論理的確な事実認識の両面から考え直すこと。逆説的ながら古典は今なお数多くのヒントを秘めていること。それらのことを輪読から学び取ることができ、輪読は本との新たな向き合い方を実体験できる新鮮なものでした(以上、北川)。

III. 学生生活におけるゼミと卒論の意義

——岩井克人先生

新型コロナウイルスによって、いま大学は異常事態です。講義がオンラインとなり、キャンパスにも入れません。大学生活が様変わりしていたことを悲しんでいる人が多いでしょう。

しかし、オンラインとはいえゼミは開かれていますし、4年生には卒論を書く機会が与えられています。そのゼミ活動と卒論こそ、文科系の大学生にとっての大学生活の中心なのです。大学とは知識を学ぶ場所だと言われます。でも、知識を学ぶだけならば、本を読んだり、YouTubeの講義を聴けばよい。実は、大学とは知識の学

び方を学ぶ場所なのです。

私たちは「知識」と言うとき、言語によって形式化できる知識を思い浮かべてしまいます。だが、科学哲学者のマイケル・ポラニーは、このような「形式知」は知識全体の氷山の一角に過ぎず、それは膨大な「暗黙知」によって支えられていると指摘しました。暗黙知とは、言語によっては他人に伝えられない実践的な技能や知恵や経験のことです。例えば自転車の乗り方はいくらマニュアルを読んでも分かりません。「見よう見まね」で何度も練習してやっと身につけられます。

本やYouTubeや大教室で学ぶのは形式知です。でも、それだけでは、知識は身につけられません。それは、まさに暗黙知によって支えられなければならないのです。その暗黙知を体得する場——それが、ゼミなのです。

ゼミでは、先生が実際にどのように思考しているかを身近に観察することができます。先生の質問にしどろもどろになっている先輩を見て、どう思考してはいけないかを知ることもできます。ゼミとは、知識の学び方を「見よう見まね」で学ぶ場であるのです。

もちろん、知識は暗黙知で留まる限り、同じような経験をもつ仲間の間でしか通用しません。すべての学問の目標は、暗黙知を形式知に高めていくことです。知識を誰もが共有できるように、言語を使って表現することです。そして、大学生活の中では、それこそが卒論を書くことの意義なのです。

卒論を一生懸命書いてください。



Katsuhito Iwai

岩井克人氏 日本を代表し、国際的に活躍する経済学者。MITにてPh.D.(1972年)。日本学士院会員、文化功労者。不均衡動学や貨幣・資本主義論、会社・法人論などの研究で名高い。近著に「経済学の宇宙」(日本経済新聞出版社、2015年)。

写真は慶應塾生新聞(2017年)より許可を得て掲載